

「 こどもを招くイエス様 」

詩 篇 第68篇5節
マタイによる福音書 第19章13節～15節

説 教 岡村 恒牧師

イエス様のところに、こどもたちが駆け寄って来た、そういう場面が記されています。こどもたちの親も、何とかしてイエス様に祝福して頂きたいと願って集まって来ていました。

マタイによる福音書第18章では、主イエスの弟子たちが「天国ではだれがいちばん偉いのですか」(1節)と尋ねています。弟子たちの関心は自分自身に向かっていました。天国に行った時、自分はいったい何番目になるのだろうか、まるで地上での関係がそのまま天国でも反映されるかのように考えています。イエス様のすぐ近くに居たいと願い、従って来たので、神様にもどれだけ近づけるか、と考えたのでしょう。

主イエスはここで、有名な《百匹の羊》のたとえ話をされました。百匹の内の一匹が失われたら、羊飼いはわざわざ捜しに行き、見つけたら大喜びをするという話です。またこのたとえ話に続いて、ペテロの問いに答えて、〈赦す〉ということについてもお話になりました。

主イエスは、父なる神様がどれほど徹底的に私たちの罪を赦して下さるお方か、ということをお話になりました。弟子たちがいつも、自分自身のことばかりを考えているのに対して、主イエスはいつも、神様の愛と赦し、また主イエスご自身の憐れみ深さをお示しになったのです。

続いてパリサイ人が登場します。神様から与えられた〈律法〉に精通し、神様に従って生きる、ということに命をかけて立派な生活をしてきた人々です。神様について他の誰よりも詳しい者だと自認するパリサイ人たちは、主イエスに挑戦してきたのです。律法の言葉を引用しながら離婚問題について問いかけました。彼らの関心事は一つ。自分たちの方が聖書について、神様についてはるかに詳しく、よく理解しているということを確認したかったのです。主イエスは、この問いへの答えにおいても、また弟子たちのやりとりにおいても、私たちの〈救い〉ということに集中するようにしてお答えになりました。

今朝の御言葉に続く16節以下には、「先生、永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか。」と尋ねてくる人が登場します。主イエスはこの問いに対して、神様の愛に注目し、信頼したら良いとお答えになりました。弟子たちの無理解、パリサイ人たちの言

いがかり、救いについて思い違いをしている人の問いが、主イエスを取り囲んでいる中で、今朝の出来事が起こっています。

「そのとき」、人々は幼な子らをみもとにつれてきました。人々の誤解と思い違いの中で、主イエスが神様の愛と赦しについて忍耐深くお示しになっていた「そのとき」の出来事です。おとなたちが主イエスを取り囲んで、神様の赦しを得、祝福を受けて永遠の生命を手にする道があるのではないかと、激しく問いかけながら、なお、誤解と思い違いにとらわれているそのときです。おとなたちを差し置いて、こどもたちが主イエスに突進して来ます。弟子たちは彼らをたしなめました。主イエスはその弟子たちの態度に「憤り」(マルコによる福音書10章14節)、幼な子を受けとめて下さいました。

主イエスのみもとに駆け寄るこどもたちの気持ちがよく分かります。私は4人兄弟ですが、幼い日、父や母のひざや耳を獲得するために激しい競争を経験しました。学校から家に帰るとまっすぐに父のひざの上に突進し、また必死で母に語りかけたものです。そこにある安心や喜びを求めていたのだらうと思います。

こどもたちはまっすぐに主イエスを目指しました。おとなたちの誤解や思い込み、主イエスに対する傲慢な態度などとは全く無関係に、ただ、両手を広げて受けとめて下さる主イエスに向かって突進して行ったのです。そこにこそ、本当の喜びがあり、恵みがあるからです。

主イエスは、「天国はこのような者の国である」(14節)と言われました。幼いこどもの純粋さや素直さを見習え、という話であるよりはむしろ、まっすぐに主イエスを目指し、全身全霊を投げ出すようにして飛び込んで来る幼な子たちを、主イエスは喜んで下さったのです。そしてこどもたちの上に手をおいて祝福して下さいました。

誰でも、主イエスを救い主として信じて、自分の勝手な思い込みや期待ではなくて、ただ、主イエスが与えて下さる赦しと祝福にだけ期待して、全身全霊をかけて主に信頼するなら、主イエスはその信仰を喜んで受けとめ、祝福して下さいます。ここにこそ、永遠の生命があり、神の国に生きる道が開かれているのです。

(記 岡村 恒)